

近代日本に於ける中国白話小説集「三言」所収篇の受容について

——神谷衡平と林房雄の訳業を中心として——

勝 山 稔

緒 言

筆者は、近代日本に於ける中国通俗文芸の受容を検討すべく、明代の代表的な短編白話小説である「三言」^{〔一〕}所収篇「三言」^{〔二〕}『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』及び「三言」の選集『今古奇観』・『京本通俗小説』^{〔三〕}収録篇の事例を時系列に即して継続的な分析を試みている。本論は複数の拙稿^{〔四〕}にまたがる五作目の考察である所から、これまでの経緯を少しく説明したい。

近年の日本における中国研究では、中国・日本・韓国（朝鮮）等の東アジア各地における各個の文化を単独事象として扱うのではなく、日本海や東シナ海などの所謂「海域の交流」によって育まれた文化として再認識しようという試みが活発に行われている。筆者はその一環として中国白話小説の近代日本における受容（翻訳）の史的動向に着目することとした。その最大の理由は、通史的な翻訳史の決定的な欠如にある。

例えば、江戸時代における研究については、石崎又造や徳田武をはじめとした多くの考察^{〔五〕}が存在することは周知の事実ではあるが、江戸時代に「読本」として一世を風靡した中国白話小説の受容が、明治時代以降どのような変遷を遂げたのかという追究は、『水滸伝』の研究^{〔六〕}を除けば殆ど行われていない。

特に「三言」で言えば、一九六〇年前後から始まった平凡社による一連の翻訳事業（東洋文庫・中国古典文学全集・中国古典文学大系）の訳文が「三言」の翻訳文献のスタンダードとして定着したためか、それ以前の約九〇年にわたる翻訳の取り組みについては、その存在さえも取り上げられていないのが現状である。

そのため筆者は、かかる日中通俗文芸の交流を探る基礎研究として、明治時代から現代に至るまでの「三言」所収篇における翻訳事例の発掘を継続してきた。その上で本稿は終戦直後（論考の便宜から、ここでは一九四六―五一年の期間と設定）における事例を中心に検討を進めることとした。

一 一九四六～五一年の動向——「三言」翻訳史上の過渡期

本論に入る前に、終戦直後における翻訳の動向と、受容史上の意義について、前後の期間を合わせて概観しておきたい。

前稿で既述した通り、明治期から昭和の終戦直後まで「三言」所収篇の翻訳に携わった人物は、服部誠一や幸田露伴、宇佐美延枝、東吐山（東海義塾）、金國璞、佐藤春夫、鈴木真海、今東光、伊藤貴麿、柳田泉、増田渉、井上紅梅と続くが、これらの訳者の顔ぶれから見て抱く素朴にして最大の疑問は、アカデミズムの立場にある研究者の少なさである。翻訳当時青年学士であった増田渉の翻訳を除けば、何れも支那愛好者や小説家、支那通等の在野の知識人による翻訳で占められ、中国白話小説研究に於ける赫赫たる専門家は殆ど翻訳事業に貢献していなかった。

しかし、その状況は一九五〇年代から一変する。すなわち、村松暎（慶應義塾大学）による『杭州綺譚——京本通俗小説』（一九五一）^⑤の刊行前後から大学研究者による「三言」所収篇の翻訳活動が俄に活発になる。すなわち、魚返善雄（東京大学講師）の『中国千一夜』シリーズ（一九五二～五三）^⑥の出版や、京都大学の吉川幸次郎『西山一窟鬼——京本通俗小説』（一九五六）^⑦が発表されると、千田九一・駒田信二・松枝茂夫ら（いずれも東京帝大卒）によって『今古奇観』全訳が発表（一九五八）^⑧され、そして遂には東洋文化協会から『全

譯中國文學大系』と題して「三言」及び「二拍」の全訳計画が発表されるに至った（一九五八～五九）^⑨。この計画は中途で挫折したもの、訳者の辛島驍（東京帝大卒・元京城帝大教授）は『醒世恒言』の全四〇篇、『警世通言』一二篇、そして『初刻拍案驚奇』三〇篇の翻訳を発表した。

つまり一九五〇年代には、「三言」所収篇にも関係が深い『京本通俗小説』や『今古奇観』の全訳が完了し、「三言」についても『醒世恒言』の全訳や『古今小説』『警世通言』所収篇の多くが翻訳されることとなるが、これらの翻訳の担い手は学術研究者≠大学の研究者で占められたのである。

また、その一方で在野の知識人による翻訳事例は一気になりをひそめ、一九四九年の佐藤春夫（小説家）による翻案^⑩と一九六〇年代の小田嶽夫（小説家）による翻訳^⑪、そして一部の児童文学作家の活動がかるうじて確認できるに過ぎなくなる。

この翻訳者層の一大転換は、「三言」所収篇の受容史の上で注目すべき画期と言えるが、本論で取り上げるところの一九四六～五一年の期間は、両者の翻訳者層が混在する言わば過渡期に位置し、「三言」所収篇の受容史を論じる上では看過しがたい時期に位置する。

この時期は、終戦直後ということもあり雑誌の保存状況が悪く、全容を把握することは難しいが、筆者の調査により現時点で確認できた翻訳者及び翻訳篇は左記の通りである。

◎佐藤春夫 一篇『警世通言』卷一九

◎神谷衡平 一篇『今古奇観』卷三〇

◎林房雄 六篇『今古奇観』卷五、『警世通言』卷一三・卷二八、『醒世恒言』卷一三・卷一五・卷三四

◎魚返善雄 四篇『今古奇観』卷六・卷八・卷一七・卷二〇

◎吉川幸次郎 二篇『京本通俗小説』卷一〇・卷一一

◎辛島驍 二篇『醒世恒言』卷六・卷一二

(◎は民間人の翻訳)

このように翻訳は六氏にもおぼる。佐藤春夫は言及済みであるためここでは割愛するが、それでも本稿は紙幅の制約もあり全てを言及するだけの余裕はない。そのため行論の便宜上二篇の論考に分割し、今回の調査で翻訳の存在が初めて明らかになった神谷衡平と林房雄氏の訳業について取り上げ、吉川・辛島・魚返氏については次稿で一括して論じることとした。

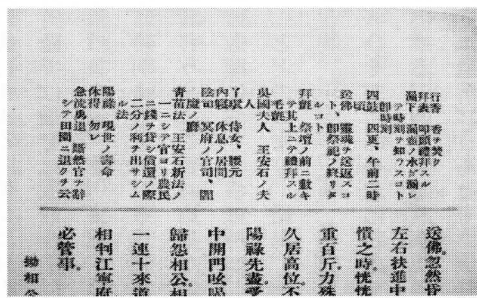
1 神谷衡平による訳註の発表

神谷衡平氏は、当時東京外国語学校(現東京外国語大学)の教授で、専門は中国語学・中国文学。著書としては『標準中華国語教科書』(文

求堂書店、一九二四)、『高級中華通用文讀本』(文求堂、一九三二)、『新選支那時文讀本』(同文社、一九四〇)などの語学学習書のほか、前稿で言及した宮原民平と共に雑誌や研究書の刊行^(十二)も手掛けている。中国古典小説の訳業としては文言小説^(十三)の翻訳も見られるが、白話小説分野では平凡社中国古典文学全集の『大宋宣和遺事』の翻訳者、と言え^(十四) 容易に想起できよう。

今回の調査で判明したが、神谷氏と「三言」所収篇との関わりは意外に古い。彼は一九二六年に早くも『支那短篇小説萃選』(文求堂)^(十五)

図1:「拗相公」の註解(『支那短篇小説萃選』)



を刊行し、『今古奇観』及び『京本通俗小説』から「洞庭紅」(『今古奇観』卷九)・「孝女藏児」(『今古奇観』卷三〇)・「拗相公」(『警世通言』卷四)の註解を発表している。その註解は詳細で訳解も充分可能な水準まで達していると思われる。ただ本書は、神谷自身が言及する通り「支那語の教科書若しくは課外読本」^(十六)を目的としたものであり、本書が翻訳に該当する

ものではない。なお「三言」関係の語学用教材としては、ほぼ同じ主旨のものに魚返善雄『旧中国小説集(甲編)』(一九四九)^(十七)があるが、こちらも『今古奇観』卷一の原文に注釈のみを施した形式にとど

まり翻訳には該当しないと判断した。

神谷氏がその後「三言」所収編の翻訳を試みたのは、それから実に二一年後にあたる一九四七年である。氏は『中国語雑誌』（二巻三号）に「（訳注読本）念親恩孝女藏児（一）」⁽²¹⁾を発表するが、これは「三言」の選集である『今古奇観』巻三〇を段落ごとに「原文」「注解」「通解」を施したものである。訳註の内容や収録雑誌の性格、そしてその後『中国語雑誌』に掲載された神谷氏による「離魂記」（二巻五号）、「韓重」（三巻一号）、「王生」（『中国語雑誌』（三巻三号）の訳註⁽²²⁾から考えると、一般向けの翻訳というより古典小説読解用の語学教材として発表された性格が強い。

神谷氏の語釈及び翻訳の一部を紹介すると、次の通りである。

原來劉員外另有一箇肚腸、一來他有箇兄弟劉從道、同妻寧氏、亡逝已過、遺下一箇姪兒、小名叫引孫、年二十五歲、讀書知事、只是有小父母雙亡、家私蕩敗、靠着伯父度日、劉員外道是自家骨肉、另眼覷他、怎當得李氏媽媽一心只護着女兒女婿、又且念他母親存日、妯娌不和、到底結怨在他身上、見了一似眼中釘、虧得劉員外暗裏保全、却是畢竟碍着媽媽女婿、不能十分周濟他、心中常懷不忍。

【註解】 另は別に。肚腸ははら、心、考へ。一來は一つに

は、其一つは。同は共に。姪兒は兄弟の子、をひ、中国語で「甥」は姑妹の子で通常「外甥」といふ。讀書は学問をする。知事が物事をわきまへてゐる。蕩敗は蕩盡する。費ひはたす。靠はたよる。伯父は父の兄であるをぢ、父の弟は叔父、北京語では伯を「大爺」（大字重念）、叔を「叔々」と云ふ。度日は日を過ごす、生活する。另眼覷他は別の眼で彼れを見る、特別に眼をかける。怎當得はいかがでか……に當り得んや、どうすることも出来ない。護はひいきする、肩を持つ。念は念頭におく、根に持つ。妯娌は兄弟の妻同志の稱呼。到底はとどのつまり、結局。一は只だ、専ら、全く。眼中釘は邪魔物、眼の上の癢。虧得は幸にも、……のお陰で。暗裏は蔭で、ひそかに。碍着はさまたげられて、きがねして。周濟は救済する、援助する。不忍は不憫に思ふ。

【通解】 もともと劉長者には別に一つの考へが有るのである。一つには彼れには劉從道といふ弟が有つたが、其妻寧氏と共に、已に死亡して、後に一人の甥を遺した。其甥は幼名を引孫と謂つて、年は二十五歳、本を読んで物事をわきまへてはゐるが、只だ幼小の時から父母揃つて亡くなり、家財は費ひ果たしてしまつたので、伯父にたよつて生活してゐる。劉長者は此甥を自家の骨肉であると言ふて、特別に目を掛けてゐるが、奈何せん妻の李氏は一途に娘と婿とをひいきしてをり、其上李氏は彼れ（引孫）の母親が存命の頃、兄弟の妻

同志不和であつたのを根に持つてとどのつまり甥の引孫に怨み移して、引孫を見ると全く眼の中に入った釘を如く邪魔物扱ひにしてゐる。劉長者が蔭で保護してゐるお蔭を破つてはゐるものの、併し畢竟劉も妻も婿にさまたげられて、十分に彼れを救済することが出来ないで、心中常に不憫に思つてゐた。

このように神谷氏は、原文の注意すべき箇所逐一傍点を附し、語彙や表現に極めて詳細な語釈や説明を施した上に「通解」という形で訳文を載せている。原文の表現を尊重する余り、若干翻訳に逐語訳的な言い回しが少なくないが、語学の専門家による翻訳であるので訳文は手堅く、また当時先行する翻訳が見られない『今古奇観』巻三〇を精密に翻訳が行われた点は評価できる。ただ、神谷氏の翻訳の試みは、その後他作品に向けられ、「三言」所収篇の翻訳が僅か一篇に終わつたことが悔やまれる(二二)。

2 林房雄による『女読むべからず』シリーズの刊行

さて、神谷衡平氏が語学的考察のため『今古奇観』の解釈を試みていた頃とほぼ同じ時期に、全く異なる目的と方法で『今古奇観』や「三言」所収篇の意欲的な受容を試みた人物が今回の調査で発見された。それが林房雄である。

林房雄(本名・後藤寿夫^{ごとうしゅうふ})は一九〇三年五月大分県大分市の生まれの小説家・思想家。彼は第五高等学校(熊本)を卒業し、東京帝国大学法科を中退した後、中野重治らとマルクス主義芸術研究会を指導し、その後プロレタリア文学作家として活躍する。しかし一九三〇年に治安維持法違反で検挙され豊多摩刑務所に入獄、三二年出所とともに転向を表明し、三六年には『プロレタリア作家廃業宣言』を発表する。戦中には報道班員として従軍し、戦後は公職追放されたほか、六三年には中央公論に『大東亜戦争肯定論』を発表するなど文学・思想面で取り上げられる事が少なくない(二四)。

この房雄は中国文学に見える娯楽的要素や軟文学的要素に着目、「女読むべからず」で始まる小説集を出版している。主要なものは次の通りである(二五)。

- 『女読むべからず春の夜話』(新文庫社、一九四九)
- 『女読むべからず夏の夜話』(京橋書院、一九五〇)
- 『女読むべからず秋の夜話』(河出書房、一九五五)
- 『女読むべからず冬の夜話』(河出書房、一九五五)
- 『女読むべからず別冊 金瓶梅物語(一)』(河出書房、一九五六)
- 『女読むべからず別冊 金瓶梅物語(二)』(河出書房、一九五六)

例えばこのシリーズ中、『春く冬の夜話』の四書には合計二九篇の話柄を収めるが、これには『今古奇観』や「三言」及び「二拍」の所

収篇（の全部或いは一部）が少なくとも九篇認められる。また本書未収録の「三言」所収篇を含めると、房雄が手掛けた数は合計一五篇に達し、これは井上紅梅による『今古奇観』の刊行（合計一〇編）を陵駕し、当時最大の規模を誇った。

しかし、彼の訳業については幾つかの疑問が残る。その最大のものが、林房雄の白話小説読解能力である。

過去の翻訳者は関係資料を調査すると相応の漢文（若しくは中国語）に関する学識が漏れなく確認できた。だが房雄については露語や英語の翻訳が十数点見られるものの、中国語や漢文については管見の限りでも一例の翻訳も確認できない。

また、彼による中国古典小説に関する言及も、殆ど認められず、『女読むべからず』シリーズにさえ、全く「まえがき」や「あとがき」が残されていない。ほぼ唯一と思われる河出書房刊『女読むべからず——中国千夜一夜（下）』の「あとがき」には、

原本は隣邦中国の艶笑綺譚であるが、精神は仏蘭西国作家バルザック氏の「風流滑稽譚」を学び、故辰野隆大博士のいわゆる豪快な豪朗和魂を発露したつもりである。敢えて成功したものとは自負せぬが。読者よ、願わくば当世流行の穢品愚品物語と混同することなく、豪にして朗なる男性的哄笑を笑い給えと申す。⁽¹⁾

と述べるに過ぎず、房雄自身が頻繁に用いた『今古奇観』や『金瓶梅』

に対して、いかなる知識や見解を有していたのかは窺い知ることが出来ず、なぜ、どのように翻訳を手掛けていたのか杳として知れなかった。

ところが二〇〇七年二月、筆者は房雄の翻訳原稿とも言うべき『女読むべからず』シリーズの自筆草稿を発見し、それが契機となり、彼による制作方法の一端が明らかになってきた。

以下、林房雄が、なぜ大量の「三言」所収篇を手掛けることになったのかという疑問を説明すべく、(一) 彼による「三言」所収篇受容の経緯の分析、(二) 翻訳状況の確認、そして(三) 房雄による「三言」受容の方法、という三点の角度から分析を試みたい。

(1) 林房雄による「三言」所収篇受容

『女読むべからず』シリーズ刊行以前の動向 房雄は何時から中国小説の翻訳を手掛け始めたのか。この経緯については房雄自身が『文学的回想』（一九五五）⁽²⁾の中で比較的詳しく述べている一節がある。

それによると、戦前プロレタリア作家から転向した経緯のため房雄は、戦後には川端康成の紹介で新夕刊社に勤めていたものの、左翼系のジャーナリスト連盟から批判を受け、総合雑誌などの有力紙への寄稿は不可能に近く⁽³⁾、戦後簇生した「中間雑誌」への発表を余儀なくされたという。その中で彼は漱石の次男で櫻菊書院にいた夏目伸六から小説執筆の依頼を受け、雑誌『小説と読物』に「香妃の妹」を発表。

横光利一をはじめ好評を得て、本誌の常連執筆者となったという⁽²¹⁾。

『小説と読物』は東京都渋谷区千駄谷にあった桜菊書院刊行の月刊誌で、言及の作品中最も早いのが「香妃の妹」(一卷三号、四六年五月)であることは右記房雄の回想から判明する。また戦前から終後に至る彼の文筆活動を追跡しても、プランゲ文庫(The Gordon W. Prange Collection)⁽²²⁾等の照合から「林房雄年譜」と同じ結論が導き出されることが確認でき、遡及してもそれ以前にかかる傾向の作品は確認できない。つまり、彼の取り組みは両者一致して一九四六年頃に始まると推測できるが、その後彼は、ほぼ毎月(時には一ヶ月に二・三本)中国小説を題材とした作品を量産している。なお、「三言」所収篇の登場はその一年後の「紅魚白魚」に始まり、管見の限りでは次の七篇が確認できた。内容は以下の通りである。

①『今古奇観』巻五

「紅魚白魚」『小説と読物』(二巻五号、四七年五月)

②『醒世恒言』巻一五

「鴛鴦の帯」『小説と読物』(二巻一一号、四七年一二月)

③『警世通言』巻一三

「奉府の易者」『小説新潮』(二巻二二号、四七年一二月)

④『警世通言』巻二八

「白夫人の妖術(第一章・第五章)」『小説と読物』(三巻二号、四八年二月)

「白夫人の妖術(第六章・第一〇章)」『小説と読物』(三巻三号、四八年三月)

⑤『醒世恒言』巻三四

「一文銭殺人事件」(第一・五回)『現代読物』(二巻二・六号、四八年三・一〇月)

⑥『醒世恒言』巻一三

「王妃の恋(第一・三回)」『ホープ』(三巻四・六号、四八年四・六月)

⑦『今古奇観』巻三八

「蜜柑と宝石」『近代ロマン』(一九四九年新年号)

右掲からも窺える通り、房雄が掲載したのは神谷氏の如き学術雑誌ではなく、終戦後の出版自由化を機に発行された一般大衆向け娯楽雑誌であった。これは戦後の混乱期に「一家の榮養失調救済のため」⁽²³⁾と房雄自身が回顧する通りで、同時期の辛島驍(『宝石』『天狗』)や魚返善雄(『桃源』『伝記』『わだち』)の事例でも共通した傾向が見える。しかし特に房雄の場合には、ジャーナリスト連盟からの批判のほか、GHQによる公職追放令(G項II軍国主義者・極端な国家主義者に該当)を受け、政治に関する言論の一切が禁止された所から、零細な雑誌に大衆小説の執筆のみ活躍が許されるという事情が背後にあるものと思われる⁽²⁴⁾。

『女読むべからず』シリーズの刊行 しかし四八年一月に大衆娯楽

誌『新文庫』から「嫉妬物語・女読むべからず冬の夜話」を嚆矢としてシリーズ化^(三十三)されるや、「大衆雑誌の編集者が注目しはじめ、私はだんだん売れっ子になった」と房雄は回想^(三十四)するが、その指摘は強ち誇張ではなく、例えば「日を追って俄然大評判。好色文学の最高峰をゆく力作」^(三十五)、「隣邦中国の興味つきぬ物語に筆を染めた、古酒にも似て滋味ふかき好色譚の決定版」等の謳い文句^(三十六)からもその反響振りが理解できる。事実、本シリーズは絶大な人気を博し、結局四九年から五五年にかけて合計四冊（収録作品数二九篇）の単行本が立て続けに刊行され、更に春陽堂^(三十七)や河出書房^(三十八)、桃源社^(三十九)等で再版されたほか、他者による類似出版^(四十)も相次ぎ、彼自身も自らを「カストリ小説の大家」^(四十一)と称するに至っている。

『女読むべからず』シリーズは何れの篇にも出典が明記されていないが、『今古奇観』、『三言』及び「二拍」を典拠としていると思われる篇は次の通りである。

○『女読むべからず春の夜話』（新文庫社、一九四九）

- ①「第一話 花嫁物語」（『今古奇観』巻二八）
 - ②「第二話 尼寺物語」（『初刻拍案驚奇』巻一九）
 - ③「第五話 喪服物語」（『初刻拍案驚奇』巻一七）
- 『女読むべからず夏の夜話』（京橋書院、一九五〇）

- ①「第三話 玉笛物語」（『醒世恒言』巻一六）
- ②「第六話 逢曳物語」（『醒世恒言』巻一六）

- ③「第七話 幽霊物語」（『醒世恒言』巻一四）
- 『女読むべからず秋の夜話』（河出書房、一九五五）

- ①「第四話 腰元物語」（『醒世恒言』巻二三）
- ②「第七話 王妃物語（王妃の恋）再録」（『醒世恒言』

巻一三）^(四十二)

○『女読むべからず冬の夜話』（河出書房、一九五五）

- ①「第三話 遊女物語（紅魚白魚）再録」（『今古奇観』巻五）

なお一九四八年初出の「白夫人の妖術」は、「三言」所収篇ながら『女読むべからず』シリーズには著録されず『白夫人の妖術』として単行本化^(四十三)され、春陽堂での刊行を経て一九五一年には新潮社の新潮文庫^(四十四)に収められるという独自の路線を歩んでいるが、これは後述する。

『中国千夜一夜』シリーズの刊行 また房雄は一九六七年にこれまでのシリーズを『中国千夜一夜——女読むべからず』と改題し河出書房から再版している。これは従来の単行本『女読むべからず』収録篇の再編が主であるが、単行本未収録篇も四篇存在し、その中には「三言」所収篇に関係する作品も、

- ①上巻（夏の夜話）第六話「鍊金物語」（『今古奇観』巻三九）
- ②上巻（夏の夜話）第七話「禁欲物語」（『醒世恒言』巻三九）

③上巻（夏の夜話）第八話「易者物語」（『警世通言』卷一三）

の通り三篇見られ、①は「鍊金物語」（『新文庫』三卷九号、一九四九）の再録、③については、「奉府の易者」『小説新潮』（一卷一二号、一九四七）の再録と判明したが、②は判然としない。

このように「三言」「今古奇観」所収篇だけでも一五篇、その他を含めると四〇篇近い中国関係の作品が確認されるが、雑誌の保存状態が劣悪な終戦直後ということもあり、未確認の雑誌や欠落号も少なくない。そのため現時点での発見分以外にも存在する可能性は充分にありえるので、房雄による活動の全容は未だ明らかではなく、今後も資料発見の可能性が多分に残されている。

（2）林房雄による翻訳状況

このように謎が多い房雄であるが、彼の翻訳状況にも従来には見られない傾向が散見される。まず「三言」所収篇中最初に発表された「紅魚白魚」の一節を紹介したい。「紅魚白魚」は『今古奇観』卷五（『警世通言』卷三二）の「杜十娘怒沈百宝箱」が出典であるが、冒頭部分での李甲青年が名妓・杜十娘に出会った場面の原文と房雄の訳文を紹介する。

那名姬姓杜、名嫩、排行第十、院中都稱為杜十娘、生得、

①渾身雅艶、遍体嬌香。兩彎眉畫遠山青、一對眼明秋水潤。臉如蓮萼、②分明卓氏文君、唇似櫻桃、何減白家樊素。可憐一片無瑕玉、誤落風塵花柳中。

那杜十娘自十三歲破瓜、③今一十九歲、④七年之内、不知歷過了多少公子王孫、一個個情迷意蕩、破家蕩產而不惜。⑤院中傳出四句口號來、道是、

⑥坐中若有杜十娘、斗宵之量飲千觴、

院中若說杜老嫩、千家粉面都如鬼。

⑦卻說李公子風流年少、未逢美色、⑧自遇了杜十娘、喜出望外、把花柳情懷一擲兒拋在他身上。

③杜娘當年一九歲、春を解してより既に七年。①遠山の青を描いた眉、秋水の明をたたへた瞳、臉は蓮の花の如く、②唇は櫻桃に似て、輝くばかりの渾身は扇げば嬌として香ひわたるかと疑はれ、かくも十全の瑕なき玉が何を誤つて風塵花柳の巷に落在したのかと見る人の眼を見張らせた。されば、④この七年間、この麗人のために家を破り産を傾けて而も悔ゆることを知らなかつた公子王孫はその数を知らず。そのため、⑤院中には次のやうな戯れ歌が流行したほどであつた。

⑥やれさ杜十娘のお酌で飲めば
すふの下戸でも酒呑の童子

杜十娘ながめて妓共見れば
大江山かよ鬼だらけ。

⑦李甲は風流の公子であるとはいへ、まだ二十代の大学生であつたから、⑧杜十娘のこのやうな艶で姿を一眼ながめてからといふものは、桜と柳が一時に双の肩にふりかかつたやうな思ひにうたれ、心もそぞろ、我を忘れてしまつた。

一瞥して随所で目に付くのが、彼による意識や改変である。例えば原文では杜十娘の容貌を韻文として表現するが、房雄はこれを地の文に織り込んでゐるのをはじめ、傍線部①では「渾身雅艶、遍体嬌香」を割愛するほか、傍線部②では「分明卓氏文君」の卓文君、そして「何減白家樊素」の白樊素など日本人に馴染みの薄い人物が削除されているほか、傍線部③のように訳文の脈絡を合わせるために前後が入れ替わっている箇所もまま見られる。また傍線部⑤⑥は概ね忠実であるが、結句の「千家粉面都如鬼」を「大江山かよ鬼だらけ」としている。大江山は山中に酒呑童子が住むと言われ源頼光の鬼退治でも有名である。房雄らしい興に任せた訳だが「都如鬼」の「鬼」は、日本で言うところの「鬼」ではない。

また傍線部⑦「風流年少（遊び好きな若者）」を「二十代の大学生」とするほか、傍線部⑧「把花柳情懷一擔儿挑在他身上」は、（李甲青年は）色恋の「情懷（情愛）」を杜十娘に注いだという内容で、「花柳」

は色恋の意味にあたり、房雄訳にある「桜と柳」の意味ではない。誤訳の可能性も考え得るが、コンテキストにはさしたる問題はないので、意訳の一種と言えるのかも知れない。

このように房雄訳は意訳の傾向が顕著であるが、後の作品は更にその度合いが強い。翻訳と言うよりも、原作に大幅な潤色を加えた翻案作品、若しくは原作に着想を得た創作に近い。紙幅の関係上詳述しないが、例えば『女読むべからず秋の夜話』第四話「腰元物語」の一節を紹介する。本話は『醒世恒言』巻二三「金海陵縦欲亡身」が母体となっているが、その冒頭部分を紹介する。

海陵道、「我賞你這幾兩銀子自有用你處、你不要十分推辭。」女待詔道、「但憑老爺分付。若可做的、小婦人盡心竭力去做就是、怎敢望這許多賞賜。」海陵笑道、「你不肯收我銀子、就是不肯替我盡心竭力做了。你若肯為我做事、日后我還有抬舉你處。」女待詔道、「不知要婦人做甚麼事。」海陵道、「大街南首高門樓內、是烏帶節度使衙內麼。」女待詔答道、「是節度使衙。」海陵道、「聞你常常在他家中籠頭、果然否。」女待詔道、「他夫人与侍婢、俱用小婦人籠頭。」海陵道、「他家中有一個丫鬟叫做貴哥、你認得否。」女待詔道、「這個是夫人得意的侍婢、与小婦人極是相好、背地里常常与小婦人東西、照顧著小婦人。」

（訳 海陵「お前にやらせたいことがあるので、我輩はその銀をやるうというのだ。そんなに断るには及ばん」

女待詔「旦那様のお言付けでございますから、出来ることでございましたら、わたくし、どんなことをしてでも、おつとめ致します。こんな御褒美をいただく段ではございません」

「お前がその銀を受け取らんのは、わしの頼みに骨を折らぬということになる。もし我輩のために、骨を折るつもりなら、将来も目に掛けてやるがどうか」

「どんなことを致しますれば、よろしいのでございましょうか」

「大通りの、南の端の高い楼門の中は、烏帯節度使の邸であろうな」

「はい節度使のお邸でございます」

「なんでも、お前は始終そこに入入りして、髪結の仕事をしているというが、その通りか」

「はい、奥方様と、侍女の方々のお髪は、わたくしがお勤め申し上げております」

「その邸に、小間使で、貴哥というのがいるそうだが、知っているか」

「その方は、奥方様のお気に入り侍女で、わたくしとはごく懇意にいたしております。他の人には内緒で、わたくしによくいろいろな物をくれまして、可愛がってもらっています」

とあるが、房雄は該当箇所を、

「その方に頼みがある。」

「はい、殿様、私にできることでございましたら、何なりと……」

「西安^{せいあん}大街^{たいがい}の南のはずれの高い朱門のある屋敷は烏帯^{ウタイ}節度使の住いであろうな。その方は兼ねて出入りの女髪結と聞いたが、しかと左様か？」

「はい、三年ほど前から、奥様と腰元様方の御用を承っております。」

「夫人はどんな人柄じやな。」

「はい、この都にも稀なる美人。お優しく、生真面目で、冗談ひとつ申されません。お名前は貴哥^{クイコ}さまと申し上げます。腰元の定哥^{テイコ}という十八娘をたいへんお気に入りです……」

と大幅に略述しているに過ぎず、原文との照合という段階ではなく、寧ろ原文との共通点を探すのに苦労する。このように林房雄の『女読むべからず』シリーズは、厳密な翻訳作業を介した翻訳というよりも、原案を元にして房雄が自由奔放に筆をふるった翻案作品に属すると言えよう。

(3) 房雄による「三言」受容の方法

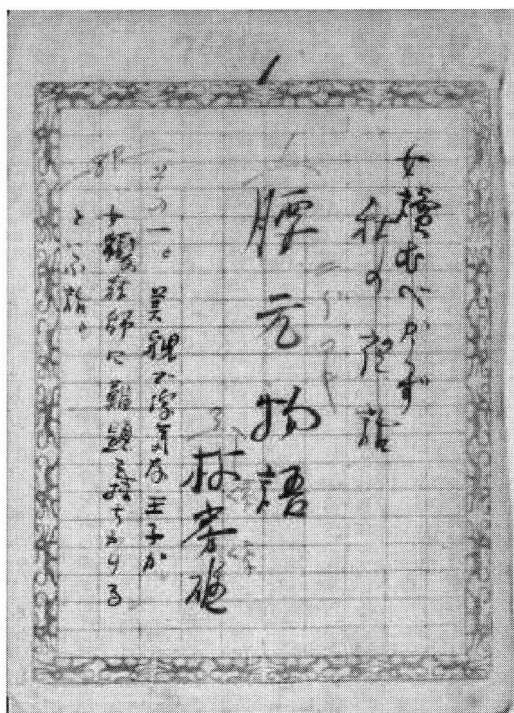
これが房雄による翻訳状況の概略であるが、白話小説読解能力が未知数の房雄は、どのようにこれだけの翻訳を手掛けることが可能であったのか。ここで今一度序論に掲げた疑問に立ち返ってみたい。

本節で取り分け房雄の語学力の有無に注目しなければならない理由

がもう一つある。それは房雄が発表した一四篇の中で、当時既訳の篇は僅か三篇に過ぎず、額面通り受け取れば実に一篇が房雄によつて初めて翻訳された計算となるからである。前稿で既述したとおり、当時の白話小説の読解は、白話語彙という難解な表現が多用されたため困難を極めていた。そのため初めての翻訳は少数編に限られ、一人の訳者では数編の新訳が限界であることが通例であつた。

そのため房雄の白話小説（中国語或いは漢文）の読解能力がどれ程のものであつたのか明確にする必要に迫られるが、今まで皆目見当も付かなかつた。

図2：林房雄「腰元物語」草稿



「女讀むべからず」の草稿の発見　ところが、二〇〇七年二月に筆者は林房雄に関する調査を進めていたところ、彼の自筆草稿を東京神田の古書肆で発見することに成功した。草稿は『女讀むべからず』シリーズの「腰元物語」（二〇〇字詰原稿用紙八一枚）で房雄の自筆（墨書）と書肆による朱筆の跡が残されている。本作は『女讀むべからず秋の夜話』（河出書房、一九五五）の第四話に収録されているが、草稿に朱書されている書肆の校正内容と河出書房の書式が異なる。そのため初出は別誌の可能性が高い。

その上で房雄の読解能力の一端を測る鍵と思われるのが、草稿に残る自筆の推敲箇所である。（この点だけでも専論が必要であるが、要点のみ掲げると）草稿を点検するに、本草稿には合計一九六箇所における自筆の訂正が認められる。その多くが単純な誤字や句読点の訂正であるが、文章や表現等の推敲が大小あわせて三二箇所確認できる。筆者はこれをもとに房雄による「腰元物語」制作過程を調査したが、それらの箇所には翻訳時の語訳的推敲の形跡が殆ど見られないことが判明した。

紙幅の都合から一例のみ、海陵王が女待詔に崇義節度使烏帶の妻定哥へ首飾を届ける依頼を行う場面を例に掲げる。

海陵王は「我如今也不惱汝了。只限汝在一個月内、要円成這事、不可十分怠緩。（私は前に対して怒っているのではない。お前は一ヶ月以内に仕上げるのだ。グズグズする暇はない）」という箇所を、房雄はまず「余は、女心の堅さを信じない。火山の熱に融けぬ針はあつて

(4) 林房雄と辛島驍

も、男の誘いにとろけぬ女心はないものじゃ、但し、時間だけはかけねばなるまい。一ヶ月の猶予を与えよう。うまく行ったら望み次第は、言うも野暮。さあ、行くがよい」とした後に推敲して、「余は、女心の堅さを信じない。火山の熱に融けぬ宝^石はあつても、男の誘いにとろけぬ女心はないものじゃ、但し、時間だけはかけねばなるまい。一ヶ月の猶予を与えよう。その道の経験のないお前でもなからう。うまく行ったら、褒美の金は望み次第。」「言うも野暮」は削除）さあ、行くがよい」と点線箇所^のの通り訂正している。

原文と対照しても明白な通り、推敲箇所は全て原文に記載されていない房雄の創作部分の変更に終始しており、他の事例を精査しても房雄の自筆原稿には語学的推敲の形跡が認められないのである。

これはあくまで『醒世恒言』巻二三の事例に限った結果であり、またこの房雄による直筆原稿が語学上の推敲を終えた清書である可能性も完全には否定できず、速断は避ける。しかし、清書段階での二百箇所近く訂正を行っているにもかかわらず、語釈上の訂正が一件も見えないのは確かに不自然と言わざるを得ない。となると、房雄自身は白話小説の翻訳をしたのではなく、林房雄に白話小説を紹介し続けた援助者の存在が想定されるが、筆者は一年余り房雄の交友関係を調査した結果、一人の中国小説研究者が浮かんできた。——辛島驍^{からしまつよし}である。

辛島驍は一九〇三年福岡生まれの中国文学研究者で、一九二八年に東京帝国大学支那文学科を卒業。同年京城帝大講師、一九三九年に教授。終戦後は鎌倉大学校や鎌倉市立図書館長、東洋大学教授を経て、専修大学、相模女子大学講師を歴任する。後に東洋文化協会『全譯中國文學大系』で「三言」「二拍」の全訳を試みた人物であることは既に前述している。

筆者が林房雄と辛島驍との関係に着目したのは、映画「白夫人の妖恋」の資料集からである。「白夫人の妖恋」は一九五六年に東宝から公開された映画作品で、その原作は房雄による「女読むべからず」シリーズの「白夫人の妖術」（一九四八年初出）である。

その際、房雄は映画の脚本を担当した八住利雄と共著で映画の資料集^{（四十）}を刊行している。それには脚本の他に、参考資料として『警世通言』巻二八「白娘子永鎮雷峰塔」の翻訳も掲載されている。翻訳は当然房雄の「白夫人の妖術」が掲載される筈であるが、実際には辛島驍が原作の翻訳を担当し、肝心の「白夫人の妖術」は、なぜか「小説」として収録されているのである。

その経緯について辛島驍は、本書の「まえがき——西湖の思い出——」でこのように言及している。

戦後、鎌倉に住むようになって、房雄氏から、中国の旧小説を

翻訳するようにすめられ、……明の短篇小説集「警世通言」の中にある「白娘子永鎮雷峰塔」を訳して、同氏に示したところ、それが近代的な息吹きによりみがえさせられてあの「白夫人の妖術」となった。^(四十六)

このように、房雄の「白夫人の妖術」は、そもそも彼自身が直接原文から翻訳を手掛けたものではなく、辛島が行った翻訳を元にして「白夫人の妖術」を執筆したというのである。確かに辛島も房雄の「白夫人の妖術」を翻訳ではなく「翻案」^(四十七)と指摘している。

これは「白夫人の妖術」の事例についてのみ言及したものであるが、後年、辛島自身が「林房雄氏の『女読むべからず』の蔭の協力者」^(四十八)であったことを告白していること、そして房雄が「女読むべからず」シリーズで扱った一二篇の「三言」所収篇のうち、後に辛島が東洋文化協会の『全譯中國文學大系』で翻訳を発表した篇は一〇篇にも及ぶ（つまり殆どの篇が重複する）という二点の状況証拠から、『警世通言』巻二八の一例にとどまらず、房雄が手掛けた十数篇もの「三言」所収篇が、辛島の翻訳を参考に執筆が行われた可能性が非常に高いと言える。

また、これは早稲田大学の近藤一成教授からの示教であるが、もともと両者は明治三六年に生まれた第五高等学校（旧制）の同級生で、旧知の間柄であった。そのため教授を務めていた京城帝国大学が閉鎖され、引き揚げてきた辛島を鎌倉に招いた一人が林房雄であったとい

う。辛島自身、終戦後久米正雄等から鎌倉移住を持ち掛けられたと指摘^(四十九)しているが、辛島は文壇に知友が多く、鎌倉文士の中でも昵懇の間柄にあった房雄の役割は大きかったに違いない^(五十)。それでは、これら「女読むべからず」シリーズは、どのような評価を受けていたのであろうか。

(5)『女読むべからず』シリーズの評価

房雄は、そもそも思想的転向やその言動の奇抜さから、生前より毀譽褒貶が甚だしい。戦前戦後を通じて流行作家であったにもかかわらず小説家としての評価は芳しくなく、『女読むべからず』シリーズの刊行時には、左派系の雑誌から「エログロ作家」として激しい批判^(五十二)を浴びている一方、三島由紀夫は自ら『林房雄論』^(五十三)を発表するなど、彼の作品は未だ評価が定まっていない。

自他共に低い評価 また『女読むべからず』を中心とした房雄の一連の作品についても、肯定的な文学的評価が行われていない。

例えば岩波文庫で林房雄短篇集を編集する際にも、『女読むべからず』の作品は収録しなかった旨が明言され、わずかに「白夫人の妖術」が収録された経緯についても、吉田健一が解説に「（林房雄）氏が最初にこの種類の作品と取り組んだ頃の夢の豊かさは、或は少くとも、作品の内容に盛り込まれた覇気は、幾分なりとも失はれたと言へるのではないだろうか。」^(五十四)と指摘、終戦直後において房雄が精力的に

執筆した白話小説に由来した作品は、「白夫人の妖術」等の初期のものはさておき、後の作品については、作者である房雄の覇気が徐々に感じられなくなってきたと批判しているのである。

他方、房雄自身の『女読むべからず』シリーズの評価も決して高くない。房雄は『女読むべからず』の執筆に関して殆どコメントを残していないが、数少ない本人の指摘を見ると、「女読むべからず」シリーズも大いに売れ、貯金が十万円になると辰野隆、日夏耿之助、久保田万太郎、三笠宮などを招待し一夜で散ずる暴挙をくりかえした」^(五十四)とあり、商業出版としては成功したとあるが、後年自らもこの時期の作家活動を「乱作の時代」と称し、「おかげで一家の榮養失調は救えたが、乱作の中に文学の方向を見失ってしまった」^(五十五)とあるほか、

「追放末期と解除後の三年間ほど、合わせて五年ほどのあいだに私は二百篇ちかい興味本位の小説を書きとばしている。……いちばんいけなかったのは、追放の末期にやつつけ仕事の小説が売れすぎ、当時続出していた「カストリ雑誌」の流行作家となり、まともな小説が書けなくなったことであつた。」

と回想^(五十六)している。

引用箇所では「女読むべからず」シリーズを直接指摘してはいないが、指摘内容と本シリーズが一致する面が多く、少なくとも著者自身は「女読むべからず」シリーズを否定的に評価していると言わざるを

得ないであろう。

ただ、中国白話小説の受容史の経過から見ると、一部の例外を除き殆ど翻案的な作品が見られなかった中で、房雄がかかる翻案作品を量産し、(半ば興味本位のタイトルではあるが)一般大衆に広く読まれた事実は、これまで受容の最初歩となる原文の翻訳という段階から一歩踏み出した存在として、また戦後日本における受容の展開(特に逐語的な翻訳の段階から話柄の受容・潤色の段階へと言う発展)を探る上では貴重な材料と言えよう。

以上述べてきたが、ここで紙数が尽きたので、本稿では神谷衡平・林房雄の訳業の分析にとどめ、民間人から大学研究者へという翻訳者層の転換に関しては次稿でまとめて詳述することとしたい。

おわりに

本論の内容を要約すると、次の通りである。

I 終戦直後の一九四七年に、東京外国語学校教授の神谷衡平氏が『今古奇観』巻三〇「念親恩孝女藏児」の訳註を発表した。これは一般向けの翻訳というより古典小説読解の語学教材として発表されたもので、専門家による訳註であるため訳文は手堅くかつ精密に翻訳が行われた点は評価できるものの、訳註は一篇にとどまった。

II また戦前戦後を通じて文学思想界で活躍した林房雄も、戦後の一時期『今古奇観』や『金瓶梅』をはじめとした中国文学に見える娯楽

的要素や軟文学的要素に着目し、『女読むべからず』シリーズを発表。

本シリーズをはじめとして、房雄は『今古奇観』や「三言」及び「二拍」の所収篇を少なくとも一五篇の翻訳を発表している。

Ⅲ 初期の作品は比較的原文に忠実な翻訳を心掛けているが、その大半は厳密な翻訳作業を介した翻訳というよりも、原案を元にして房雄が自由奔放に筆をふるった翻案作品に属した。また房雄の自筆原稿を検討した結果、一連の作品は房雄自身の翻訳ではなく、寧ろ辛島驍による翻訳の可能性が強いことが判明した。

Ⅲ 『女読むべからず』シリーズは商業出版としての成功とは裏腹に、識者の評価も房雄自身の評価も芳しくない。しかし、中国白話小説の受容史の経過から見ると、房雄の一連の翻案作品の存在は、戦後日本における受容の展開を探る上では貴重な材料と言えよう。

本稿は平成二一年度文部科学省科学研究費補助金（特定領域研究）の交付を受けた研究成果の一部である。

(一)『京本通俗小説』は、一九一二年繆荃孫氏が発見した八篇の小説集で、後に偽作と判明したため、現在では取り上げるべき作品ではない。しかし、斯界では長くその名が通用し、その何れの篇も「三言」所収篇と重複していた所から本稿では当時の現状に即して言及した。

(二)拙稿「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——明治時代から大正時代までの翻訳事業を中心として」(『国際文化研究科論集』第一四号、二〇〇六)、同「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——一九一〇年代～二〇〇年代の動向を中心として」(『国際文化研究科論集』第一四号、二〇〇六)、同「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——一九二六年～一九三九年までの動向を中心として」(『国際文化研究科論集』第一五号、二〇〇七)、同「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について——一九四〇年～一九四五年までの動向を中心として——『国際文化研究科論集』第一六号、二〇〇八)。

(三)主要なものとして石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文學史』(弘文堂書房、一九四〇)、徳田武『日本近世小説と中国小説』(青裳堂書店、一九八七)。詳細は、青木稔弥他編『読本研究文献目録』(溪水社、一九九三)を参照のこと。

(四)高島俊男『水滸伝と日本人——江戸から昭和まで——』(大修館書店、一九九一)参照。

(五) 村松暎『杭州綺譚』(酣燈社、一九五一)。

(六) 魚返善雄『中国千一夜(風雅の巻)』(日本出版協同、一九五二)、同

『中国千一夜(香艶の巻)』(日本出版協同、一九五三)、同『中国千

一夜(智謀の巻)』(日本出版協同、一九五三)。

(七) 吉川幸次郎『西山一窟鬼 京本通俗小説』(筑摩書房、一九五六)。

(八) 千田九一他『今古奇観(上)』(中国古典文学全集一八、一九五八)。

駒田信二・松枝茂夫『今古奇観(下)・三言二拍抄』(中国古典文学全集一九、一九五八)。

(九) 辛島驍『醒世恒言(一〜五)』(東洋文化協会全譯中國文學大系第一集第一〇〜第一四卷、一九五八)。同氏『警世通言(一)』(東洋文化協会全譯中國文學大系第一集第六卷、一九五九)。

(十) 佐藤春夫『三妖一家の話』(サンデー毎日別冊新緑傑作集、一九四九年五月一日号)。本作品については、須田千里氏が原典との比較考察を行っているが、『警世通言』に拠りながら、各人物の性格を造型しようとした点、また末尾に主題に関わる改変が見られる点で、本作は翻案とも創作ともいべき作品である。」と指摘している。須田千里『佐藤春夫と中国文学(上)』(『文学』岩波書店、二〇〇一年七八月号) 一八七頁参照。

(十一) 小田嶽夫『中国でかめろん(世界セクシー文学全集)』(新流社、一九六一)。

(十二) 魚返善雄『花つくり爺さんと天女の話』『わだち=THE WADACHI』

(日本通運株式会社わだち編集部第一一巻第一一〜一二号、一九四八年一一〜一二月)、同『李白の外国語——警世通言・今古奇観の一

篇』李謫仙醉草嚇蛮書』(『桃源』第四卷第一号、一九四九年一月)、

同『莊子の妻』(『伝記(国民雑誌)』第三卷第一号、一九四九年一月)、

同『蘇東坡の妹』(『桃源』第四卷第三号、一九四九年六月) 参照。

(十三) 吉川幸次郎『玉の観音(上)』(『芸林間歩』創刊号、一九四六)、

同『玉の観音(下)』(『芸林間歩』第二号、一九四六)、同『菩薩蛮』

(『芸林間歩』第七号、一九四六)。なお、吉川氏は戦前にも『亡者の世界』(『知性』第三卷第九号、一九四〇)を発表している。

(十四) 辛島驍『韓夫人の神様(上)』(『寶石』第三卷第九号、一九四八年二月)、同氏『韓夫人の神様(下)』(『寶石』第四卷第一号、一九四九年一月)、同『狐の天書』(『天狗』第三卷第三号、一九四九)。

(十五) 神谷衡平・宮原民平他編『華語集編』(蜚雪書院、一九四二)、神谷衡平・宮原民平他編『華語集刊(第一輯)』(蜚雪書院、一九四二) 参照。

(十六) 神谷衡平『定婚店』『桃源』(九号、一九四八)、同『ある男と女の話』(『中国語雑誌』(第三卷第四号、一九四八)、同『織女と人間の男』『桃源』(第四卷第二号、一九四九)。

(十七) 『京本通俗小説・雨窓欽枕集・清平山堂話本・大宋宣和遺事』(平凡社中国古典文学全集第七卷、一九五八) 参照。

(十八) 神谷衡平『支那短篇小説萃選』(文求堂、一九二六)。

(十九) 『支那短篇小説萃選』の姉妹編として同じく文求堂から刊行された『支那長篇小説選鈔』(文求堂、一九二六) 序文によると、「此書刊行の目的は、主として支那語の教科書若しくは課外読本に充てん為なれども、亦以て支那小説の一斑を見んと欲する一般人士の津梁

となり得ば幸甚なり」とある。

(二十) 魚返善雄『旧中国小説集(甲編)』(目黒書店、一九四九)。

(二十一) 神谷衡平「(訳注読本) 念親恩孝女藏児(一)」、『中国語雑誌』第二巻第三号、一九四七年。題目に(一)とあるので続編も十分に考えられるが、管見の限りその存在を確認することは出来ない。

(二十二) 神谷衡平「離魂記」、『中国語雑誌』(第二巻第五号、一九四七)、『韓重』、『中国語雑誌』(第三巻第一号、一九四八)、『定婚店』、『桃源』(第九号、一九四八)、『王生』、『中国語雑誌』(第三巻第三号、一九四八)。

(二十三) なお神谷氏の使用した『今古奇観』巻三〇「念親恩孝女藏児」は、現在の『今古奇観』(及び『初刻拍案驚奇』巻三八)の定本として用いられている版本とは異なるので、訳本を扱う上では注意を要する。

(二十四) 林房雄氏の文学・思想活動やその生涯については、毛利順男氏の「林房雄の生涯及び文学的創造」(『鶴見大学紀要(第一部 国語国文学編)』第三二号、一九九四)を参照されたい。

(二十五) このシリーズは書肆が変更される度に同一書名でも構成が改編される複雑さを持つため、ここでは考察の便宜上初出のものだけを掲示した。

(二十六) 「あとがき」(『女読むべからず——中国千夜一夜(下)』(河出書房、一九六七)二四五頁参照)。

(二十七) 林房雄『文学的回想』(新潮社、一九五五)。

(二十八) 林房雄「林房雄年譜」(『大東亜戦争肯定論——林房雄著作集

(一) 翼書房、一九六八)四五八頁参照。

(二十九) 前掲『文学的回想』一九八〜一九九頁参照。また房雄自筆による「林房雄年譜」によると「夏目伸六編集の『小説と読物』に「香妃の妹」「妖魚」「白夫人の妖怪」等を発表。横光利一のひそやかな讃辞」を受けたこともある。前掲「林房雄年譜」四五八頁参照。

(三十) プラング文庫はGordon William Prangeによって検閲された終戦直後(一九四五〜四九)の出版コレクション。メリーランド大学図書館に所蔵されるが、今回は大学共同利用機関法人 国際日本文化研究センター所蔵のマイクロフィルムを使用。

(三十一) 前掲「林房雄年譜」四五八頁参照。

(三十二) 前掲『文学的回想』一九九頁参照。

(三十三) 一九四八〜四九年までに九本雑誌連載が確認できる。『新文庫』(第二巻第八号〜第三巻第一〇号)参照。

(三十四) 前掲『文学的回想』一九八頁参照。

(三十五) 『新文庫』(第三巻第九号、一九四九)七三頁参照。

(三十六) 『新文庫』(第三巻第七号、一九四九)六四頁参照。

(三十七) 林房雄『女読むべからず春の夜話 白夫人の妖術』(春陽堂、一九五〇)。なお林房雄『現代長篇小説全集(第四巻)』(春陽堂、一九五〇)では「女読むべからず春の夜話」「白夫人の妖術」が再録されている。

(三十八) 林房雄『女読むべからず春の夜話』(河出書房、一九五五)、同氏『女読むべからず夏の夜話』(河出書房、一九五五)。なお河出書房版『女読むべからず春の夜話』は、新文庫社版『女読むべからず

春の夜話』の第七話「裸女物語」・第八話「結婚物語」が割愛され、同じく河出書房版『女読むべからず夏の夜話』も、京橋書院版『女読むべからず春の夜話』の第二話「王妃物語」・第五話「菊花物語」が収録されていない。

(三十九) 林房雄『春の夜話 女読むべからず』(桃源社ポピュラーブックス、一九六五)、同氏『秋の夜話 女読むべからず』(同社、一九六五)、同氏『冬の夜話 女読むべからず』(同社、一九六六)、同氏『春の夜話 女読むべからず』(同社、一九六六)。また『ドン・ジュアン物語 女読むべからず』(同社、一九六六)、『金瓶梅物語 女読むべからず』(同社、一九六六)も刊行されている。

(四十) 荒木光雄編『女読むべからず夏の夜話』(立山書房、一九四九)、矢野目源一『恋愛術 女読むべからず男性篇』(アソカ書房、一九五〇)。

(四十一) 「林房雄年譜」四五九頁参照。なおカストリ雑誌は、終戦直後の混乱期に大量に出回った粗悪な仙花紙で印刷された安価な雑誌を指し、内容は興味本位でエログロ・ナンセンスなものが多い。詳細は山本明『カストリ雑誌研究——シンボルにみる風俗史』(出版ニュース社、一九七六)を参照。

(四十二) 基本的には林房雄『碧玉の笛』(労働文化社、一九四八)所収「王妃の恋」の採録であるが、文体を始め全体が細部にわたって改変されている。

(四十三) 林房雄『白夫人の妖術』(扶桑書房、一九四八)。

(四十四) 林房雄『白夫人の妖術』(新潮文庫、一九五二)。

(四十五) 林房雄・八住利雄著『白夫人の妖術——小説・原作・シナリオ』(大日本雄弁会講談社、一九五六)。

(四十六) 辛島驍「まえがき——西湖の思い出——」(林房雄・八住利雄『白夫人の妖術——小説・原作・シナリオ』大日本雄弁講談社、一九五六)七頁参照。

(四十七) 前掲「まえがき——西湖の思い出——」八頁参照。

(四十八) 辛島驍『暗号と推理』(講談社、一九六二)巻末著者略歴参照。

(四十九) 前掲『暗号と推理』「著者略歴」参照。

(五十) また筆者の推測ではあるが、清水崑の存在も無視できない。そもそも清水と房雄は、(G項追放後に入社した)新夕刊新聞の同僚で、「女読むべからず」シリーズの挿絵の大半は清水によって描かれている。一方辛島も前述の通り「三言」所収篇の翻訳を『宝石』『天狗』に発表しているが、その挿絵を担当したのも清水崑で一致する。恐らくは房雄の手配によるものと思われるが、ここからも辛島と房雄の懇意な関係が推察できよう。清水崑(本名・清水幸雄)は一九一二年長崎市に生まれ、旧制長崎市立商業高校卒業後上京し、本格的に漫画を描きはじめる。横山隆一・近藤日出造らの新漫画派集団に参加し、一九三五年『新青年』に「東京千一夜物語」を連載。戦後は「新夕刊新聞」の政治漫画を担当後朝日新聞社の嘱託となり、一九五三年からは週刊朝日で代表作となる「かつぱ天国」を連載、それが黄桜酒造社長・松本司郎の目に留まり、一九五五年から同社のキャラクターとして採用されたのは有名な話である。

(五十一) 諸戸歩「林房雄論(戦犯文化人)」(『文化革命』第三号、一九

近代日本に於ける中国白話小説集「三言」所収篇の受容について――神谷衡平と林房雄の訳業を中心として――

四八）二三頁参照。

（五十二）三島由紀夫『林房雄論』（新潮社、一九六三）。なお林房雄と三島由紀夫の対談集として『対話・日本人論』（番町書房、一九六六）もある。

（五十三）吉田健一「解説」（林房雄『白夫人の妖術』岩波文庫、一九五一）一九四頁参照。

（五十四）林房雄『林房雄著作集（一）』（翼書房、一九六八）四六〇頁参照。

（五十五）前掲『林房雄著作集（一）』四五九頁参照。

（五十六）林房雄「私の履歴書」（『私の履歴書（第二四集）』日本経済新聞社、一九六五）一九三頁参照。